



PRESS RELEASE

PRISM BioLab とエーザイが共同創出した E7386、 エーザイが第 I b/ II 相臨床試験の用量拡大コホート結果に関する論文を発表

2026年10月9日：— 株式会社PRISM BioLab（本社：神奈川県藤沢市、以下「PRISM BioLab」）は、このたび、当社とエーザイ株式会社（本社：東京都文京区、以下「エーザイ」）により共同創出されたE7386（*1）について、エーザイにより実施された第 I b/ II 相臨床試験結果に関する学術論文が、The Lancetグループが発行する査読付きオープンアクセス医学雑誌「*eClinicalMedicine*」に掲載され、公開されましたのでお知らせいたします。

本論文は、プラチナ製剤ベースの化学療法および抗PD-(L)1免疫療法後に病勢進行した進行子宮内膜がん患者を対象として、E7386とレンバチニブ（製品名：「レンビマ[®]」）（*2）との併用療法を評価した第 I b/ II 相臨床試験（102試験、NCT04008797）（*3）の用量拡大コホートの結果です。本試験により、E7386とレンバチニブの併用療法において管理可能な安全性プロファイルと抗腫瘍活性が示され、現在進行中の用量最適化パートを進める上で有用な知見が得られました。

詳細につきましては下記をご参照ください。

【論文情報】

論文タイトル：E7386 plus lenvatinib in patients with advanced endometrial cancer that progressed on platinum-based chemotherapy and an anti-PD-(L)1 immunotherapy: A single-arm, open-label, global phase 1b/2 dose-expansion cohort

（邦訳：プラチナ製剤ベースの化学療法および抗PD-(L)1抗体による免疫療法後に病勢進行した進行子宮内膜がん患者を対象としたE7386とレンバチニブの併用療法の評価：国際共同単群非盲検第1b/2相試験の用量拡大コホート）

雑誌名：*eClinicalMedicine*. 2026;100:104206

DOI: <https://doi.org/10.1016/j.eclinm.2026.104206>

【発表要旨】

背景：進行子宮内膜がん（aEC）では、化学療法と免疫療法後に再発した患者に対する新たな治療法が求められている。レンバチニブは、プラチナ製剤ベースの化学療法後のaEC患者に抗腫瘍効果を示し、既治療のaECに対してペムブロリズマブとの併用療法として承認されている。E7386はPRISM BioLabとエーザイが創製した経口投与可能なCBP/β-カテニン相互作用阻害剤である。

本論文では、プラチナ製剤ベースの化学療法および抗PD-(L)1抗体による免疫療法後に病勢が進行した進行子宮内膜がん患者を対象として、E7386とレンバチニブの併用療法を評価した第1b/2相臨床試験（102試験）の用量拡大コホート全体の結果を報告する。

結果：登録患者30例を対象とした解析において、本併用療法は管理可能な安全性プロファイルを示し、Grade 4またはGrade 5の治療関連有害事象は認められなかった。また、11例で奏効が確認され、客観的奏効率（ORR）は36.7%であり、これらには、過去にレンバチニブによる治療を受けた患者の奏効例も含まれていた。レンバチニブ未治療患者のORRは57.1%であった。

結論：E7386とレンバチニブの併用療法は、化学療法および免疫療法後に再発した多剤治療歴を有する進行子宮内膜がん患者において、管理可能な安全性プロファイルと有望な抗腫瘍活性を示した。現在、102試験（NCT04008797）の用量最適化パートが進行中である。

<解説>

(*1) E7386について

エーザイと共同創出した経口投与可能なCBP/ β -カテニン相互作用阻害剤であるE7386は、がん細胞の悪性化に関与するCBP/ β -カテニンシグナルの下流において、 β -カテニンとCBPのタンパク相互作用を阻害する経口低分子薬です。2021年10月にPOC(Proof of Concept)を達成し、現在は単剤での固形がんを対象とした第 I 相臨床試験のほか、他の抗がん剤との併用による固形がんを対象とした後期第 I b相／第 II 相臨床試験が、エーザイにより実施されています。

(*2) レンバチニブ（製品名：「レンビマ[®]」）について

レンバチニブは、血管内皮増殖因子受容体（VEGFR）であるVEGFR1、VEGFR2、VEGFR3や線維芽細胞増殖因子受容体（FGFR）のFGFR1、FGFR2、FGFR3、FGFR4に加え、血小板由来増殖因子受容体（PDGFR）のPDGFR α 、KIT、RETなどの腫瘍血管新生あるいは腫瘍悪性化に関与する受容体型チロシンキナーゼに対する選択的阻害活性を有する、経口投与可能なエーザイ創製のマルチキナーゼ阻害剤です。非臨床研究モデルにおいて、レンバチニブは、がん微小環境における免疫抑制因子として知られている腫瘍関連マクロファージの割合を減少させ、活性化細胞傷害性T細胞の割合を増加させることで、抗PD-1モノクローナル抗体併用時は、レンバチニブおよび抗PD-1モノクローナル抗体のそれぞれの単剤療法を上回る抗腫瘍活性を示しました。

(*3) 102試験（NCT04008797）について

エーザイが実施している固形がん患者を対象としたE7386とレンバチニブとの併用療法を評価するための非盲検第 I b/ II 相試験です。臨床試験の詳細につきましては、ClinicalTrials.govをご覧ください。

<https://clinicaltrials.gov/study/NCT04008797>

【株式会社 PRISM BioLab について】

PRISM BioLabは、独自に開発した α -ヘリックス・ β -ターン模倣技術を活用して、低分子化合物によるタンパク質間相互作用（PPI）の制御による創薬を目指している企業です。PRISM BioLabは、従来困難であった細胞内で様々な信号を伝達するPPIを制御する独自のペプチド模倣技術である『PepMetics[®]』を構築し、がんや線維症分野の臨床パイプラインを創出するとともに、国内外の多数の大手製薬会社と提携してこれまでに無い難病治療薬の創出に取り組んでいます。

詳しくは、<https://prismbiolab.com>をご覧ください。

【PRISM Biolab 会社概要】

社名	：	株式会社PRISM BioLab（PRISM BioLab Co., Ltd.）
創業	：	2006年11月
本社所在地	：	神奈川県藤沢市村岡東二丁目26番地の1 湘南アイパーク
事業内容	：	創薬技術開発及び創薬
代表取締役	：	竹原 大
URL	：	https://prismbiolab.com